

伊澤エイに関する研究(3)

奥 野 知 加

はじめに

前回の伊澤エイに関する研究(3)では、渡欧前と帰国後の作品を比較考察すると共に帰国後の作品傾向と留学中の研修活動との関連を探ってみた。その中で帰国後の作品傾向として次のような事柄が明らかにされた。

1. 渡欧前の作品は緊張、静止など断続する動きのリズムが多くみられるのに対し、帰国後は多様なリズムと流れを有する構成になっている。2. 作品全体が振動運動を中心に構成されている。これらの結果をふまえた上で本研究では引きつづき帰国後の作品分析を年代順にすすめて行き、前回の作品傾向が以後どのような変化、展開を呈するものか知ろうとするものである。取り上げる作品は、帰国直後(昭和4年4月)から、昭和6年1月までに創られた35作品の内、前研究より引き続きの6作品を対象とした。方法は前回に準じ、舞踊符と略図によって作品全体の概容をつかみ基本運動別に分類、その使用頻度を知ることによって動きの内容を明確にする。また今回は動きの内容と共に作品の表現内容にも注目していきたいと考える。

方 法

1. 対象作品の選定

「伊澤エイに関する研究(I)」における作品一覧¹⁾に基づき、以下の6作品を対象とした。前回までに帰国後の3作品を取り上げているので今回は続く6作品が該当する。

「私 たち」	昭和6年1月	(128呼間)
「喜 び」	昭和6年1月	(96呼間)
「友 千 鳥」	昭和6年1月	(168呼間)
「親 鳥 子 鳥」	昭和6年1月	(208呼間)*
「ダンスオブピース」	昭和6年1月	(128呼間)
「波 上 の 月」	昭和6年1月	(192呼間)*

カッコ内の数字は実動呼間数であるが、*印の作品に関しては2人組の作品であり、各々が別の動きを行う為に集計上の実動呼間数は多くなっている。

2. 作品解説を略図と舞踊符に転化する

伊澤エイ著「体育ダンス」(昭和6年1月31日)における作品解説をもとに、対象となる6作品の動きを略図化し、それに舞踊符と呼間数を同時進行させて、作品全体の流れと感じを把握する。

略図及び舞踊符，呼間数の取り扱いについては，田川典子・高橋繁美著「図説ダンスの基本運動」（昭和58年7月5日）の凡例²⁾に従う。

3. 動きの分類

(1) 2で明らかになった個々の作品の動きについて，その主たる運動要素は何であるかを基本運動の観点から見極め，それぞれの運動別に分類する。分類及び基本運動の設定については，「図説ダンスの基本運動」に則る。ただし，便宜上基本運動の内容を細分化し，通し記号を付け表1のようにする。以後基本運動名はそれぞれの記号をもって表わす。（表1参照）

表 1 基本運動分類表

I 緊張・解緊	(a) 緊張
	(b) 解緊
II 重心移動	(c) 山型・水平・舟底型移動
	(d) 歩(ウォーキング)
	(e) 走(ランニング)
	(f) 跳躍(ジャンプ)
	(g) 各種ステップ
	(h) 平均(バランス)
	(i) 倒
III 振動	(j) 振動(振る)
IV 弾性	(k) 弾性(弾む)
V 蛇動	(l) 蛇動(動揺)
VI その他	(m) ポーズ
	(n) 手拍子

(2) 基本運動別に分類されたものが，それぞれの作品の中でどのような展開をなしているかをみるため，その運動と呼間数を作品の流れに沿って帯状に図表化する。（表2～表7参照）

4. 基本運動使用頻度調査

(1) 作品別にみる使用頻度

1つの基本運動がその作品中に使用された頻度をみるために，その基本運動毎に実動呼間数をトータルし，作品ごとの表とする。（表8参照）

(2) 使用頻度グラフ

4-(1)の結果をもとに6作品全体の使用頻度をみるために，それぞれの基本運動実動呼間数を合計し，それをパーセンテージに換算したものをグラフ化する。（グラフ1参照）

図1 「私たち」 隊形 二重円

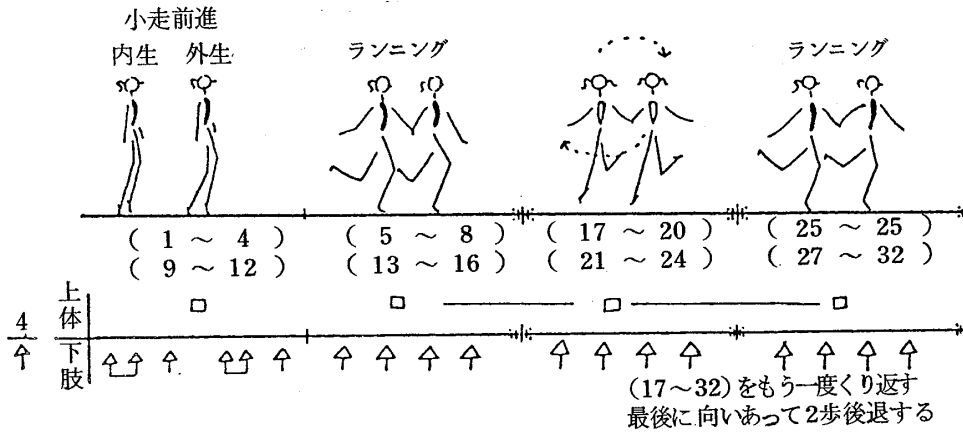


図2

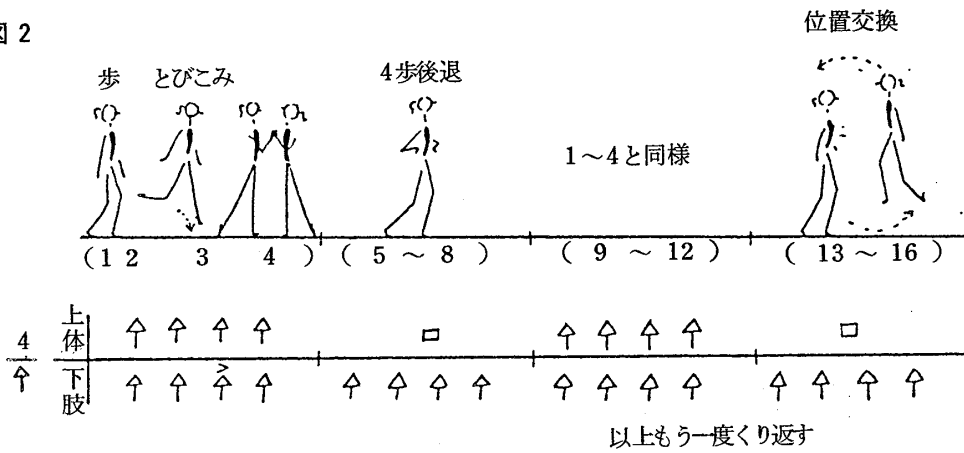


図3 「喜び」 隊形・体操隊形

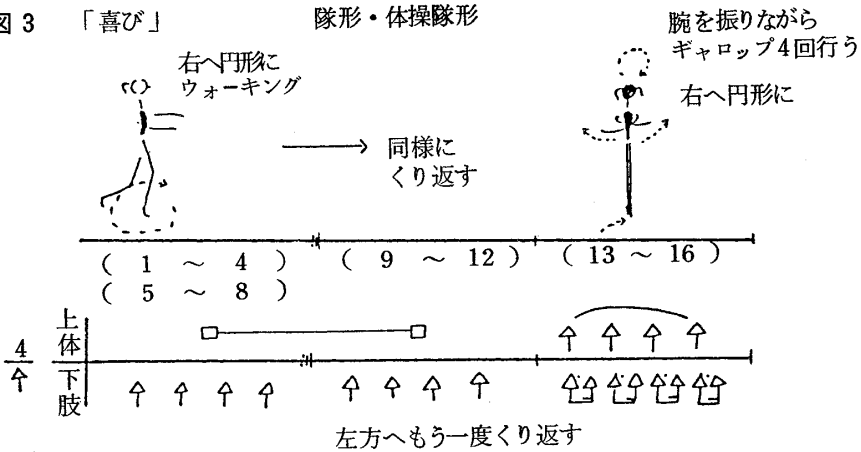


図4

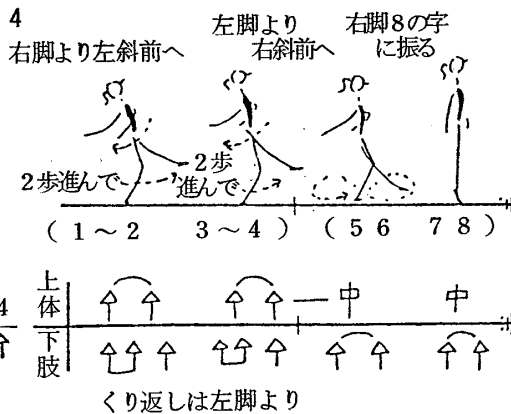


図5

右方へ $\frac{1}{2}$ 回転 とびこむ
 左足を引き 右脚をあげる
 前方へ 1と同じ
 右脚右膝について ホップ
 左横へ ホップ

(1 2 3 4) (5~6 7~8)

4	上体	↑	↑	↑	↑	↑	↑
↑	下肢	↑	↑	↑	↑	↑	↑

図6

右斜前へ 3歩
 跳んで2回屈伸

(1~3 4) (5~6 7~8)

4	上体	↑	↑	↑	↑	↑	↑
↑	下肢	↑	↑	↑	↑	↑	↑

くり返しは左より

図7

右脚2回打ちながら 強く打って 後方へ円形行進
 右手で8の字振り 後ろに跳ぶ

(1~4) (5 6~8)

4	上体	↑	↑	↑	↑	↑	↑
↑	下肢	↑	↑	↑	↑	↑	↑

くり返しは左足より

図8 「友千鳥」 隊形 二重円

歩く
 1~8と同じ

(1~8) (9~16) (17~24) (25~32)

8	上体	□	□	□	□
↑	下肢	↑	↑	↑	↑

次の8呼間歩で前進し最後で対向する

図 9

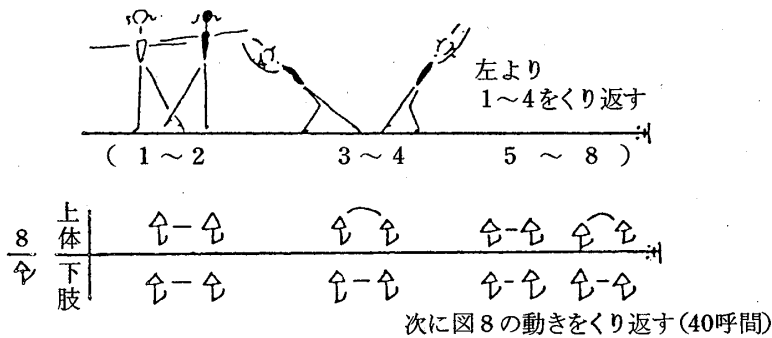


図 10

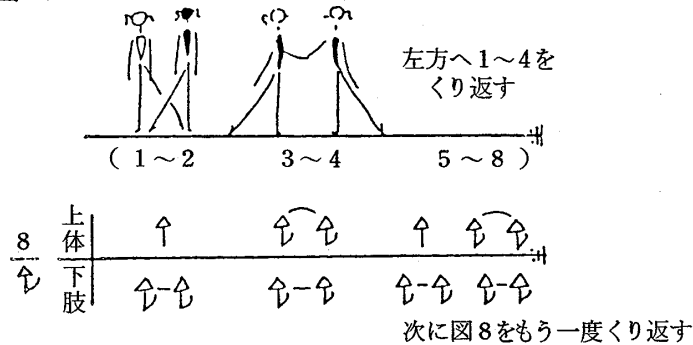


図 11

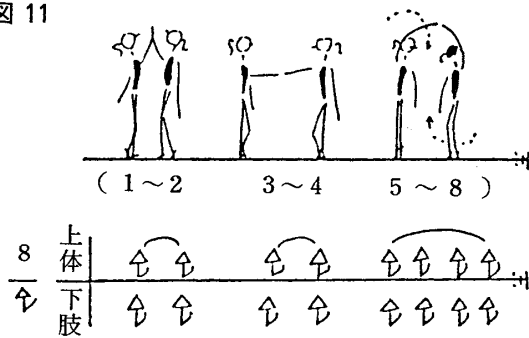


図 12 「親鳥子鳥」 隊形一重円(1,2の番号をつける)

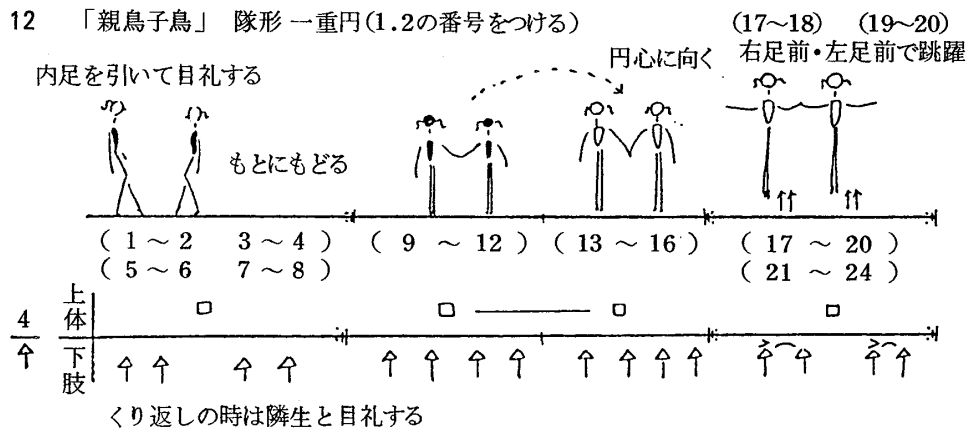


図 13

1番生 円心へ歩く
2番生 左右にホップ 4回
左に $\frac{1}{2}$ 回転
2番生 1回転
1番生 拍手 手招き
回転しながらもとの位置へ

(1 ~ 4) (5 ~ 8) (9 ~ 12) (17 ~ 20)
(13 ~ 16) (21 ~ 24)

1番生 上体 4 下体
2番生 上体 4 下体

次に図12 (17~24), 図13 (1~8)を交代して行う (16呼間)
同じく図13 (9~24)をくり返すが最後に二人向い合う (16呼間)

図 14

跳躍 2歩側進 右側で4回跳躍

(1 ~ 4) (5 ~ 8) (9 ~ 12) (13 ~ 16)

4 上体 下体

以上を左脚よりもう一度行う (16呼間)

図 15

セットを行う 円形行進し最後に2重円となる 前進 後方へ

(1 ~ 4) (5 ~ 8) (9 ~ 12) (13 ~ 16) (17 ~ 20) (21 ~ 24) (25 ~ 28) (29 ~ 32)

4 上体 下体

最後に1重円となり内側の手をとる

図 16

バランスステップ 車輪行進 前方へ 後方へ

(1 ~ 4) (5 ~ 8) (9 ~ 12) (13 ~ 16) (17 ~ 20) (21 ~ 24) (25 ~ 28) (29 ~ 32)

4 上体 下体

(1~16)をもう一度行う (16呼間)

図 17

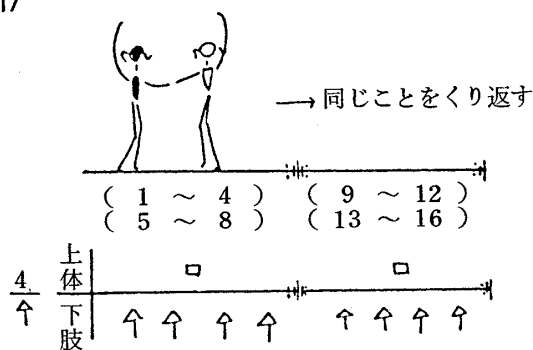


図 18 「ダンスオブピース」 隊形一重円・連手

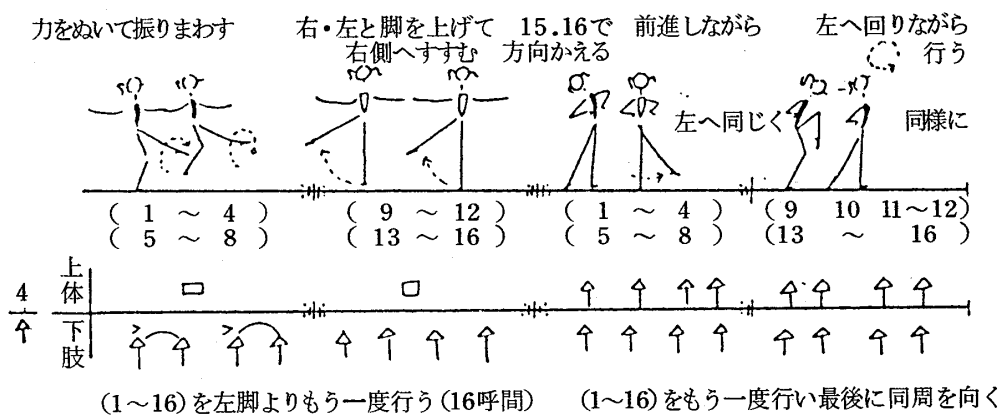


図 19

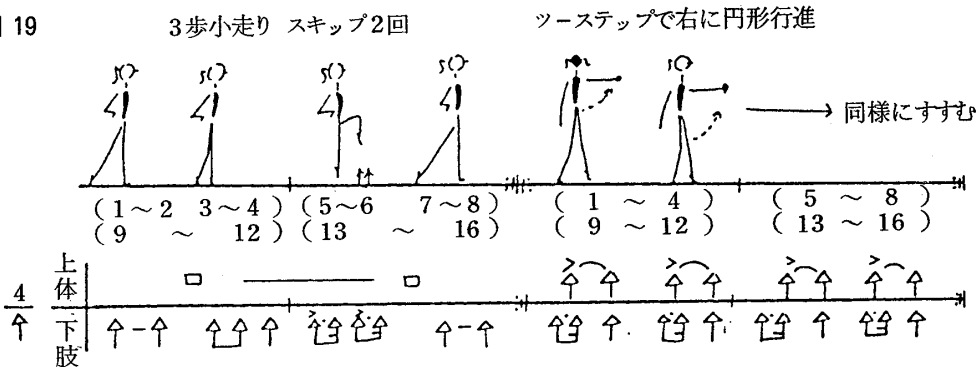


図 20

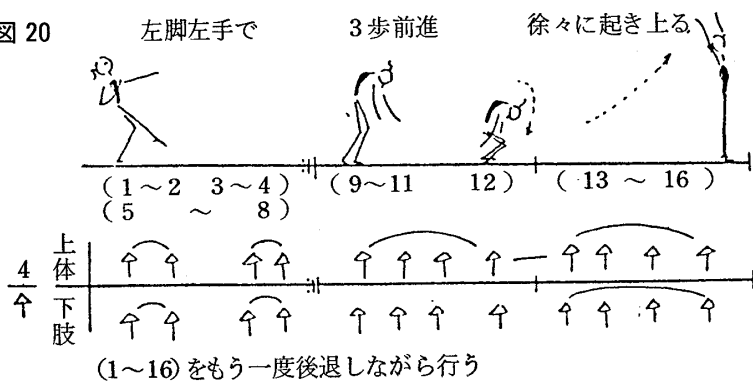
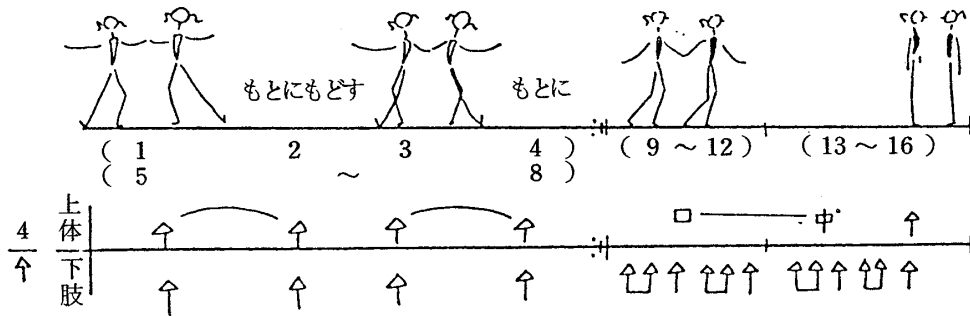


図 21 「波上の月」 隊形2列縦隊 1.2の番号をつける

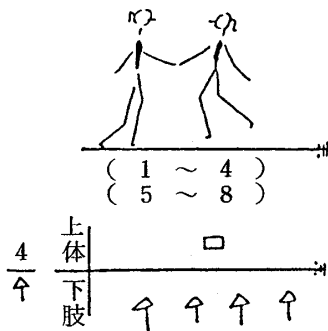
交換歩4歩で最後に向い合う



お互いに対向したまま(1~8)を行う(8呼間)

図 22

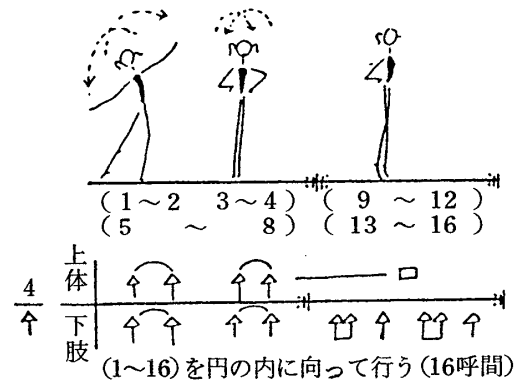
位置交換し
最後に前後に面する



これまでのところを前後に面して行う(32呼間)

図 23

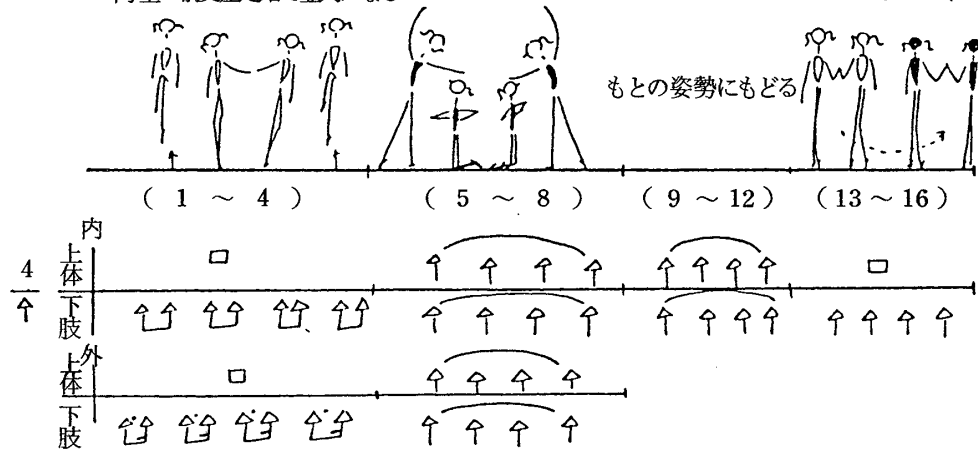
体前交差より側へ もとに戻す 交換歩で外へ



(1~16)を円の内に向って行う(16呼間)

図 24

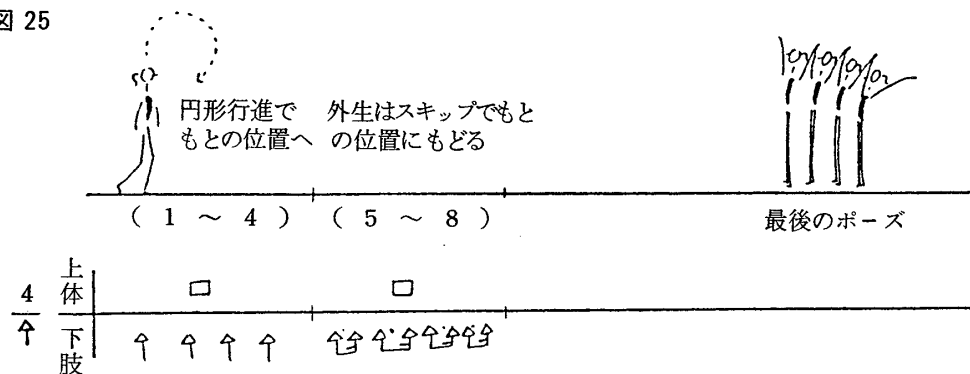
外生・スキップ1回
内生・前交差足踏で並列になる



(5~12)をもう一度くり返す(8呼間)

図 25

円形行進で 外生はスキップでもと
もとの位置へ の位置にもどる



もう一度図 24 (1~16)及び図 25 (1~8)をくり返す,ただし1番生は後退し,最後は4人連手のまま腕を上げる

表2 私たち (128呼間)

0	4	8	12	16	20	24	28	32	36	40	44	48	52	56	60	64
d	e	d	e	e								d				

64	68	72	76	80	84	88	92	96	100	104	108	112	116	120	124	128
d	e	d	e	e								d				

表3 喜び (96呼間)

0	4	8	12	16	20	24	28	32	36	40	44	48	52	56	60	64
d				g	d				g	j	j		j	f	j	f

64	68	72	76	80	84	88	92	96	
d	k	d	k	j	f	d	j	f	d

表4 友千鳥 (168呼間)

0	4	8	12	16	20	24	28	32	36	40	44	48	52	56	60	64
d										c				d		

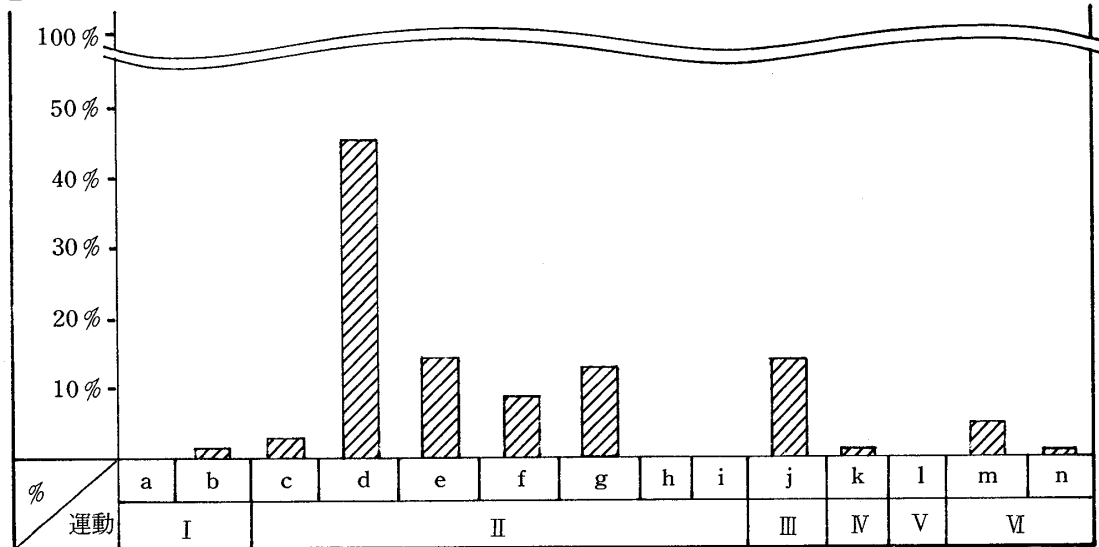
64	68	72	76	80	84	88	92	96	100	104	108	112	116	120	124	128
d										c				d		

128	132	136	140	144	148	152	156	160	164	168
d							c	d	c	d

表 8 各作品にみられる基本運動

基本運動 作品	I		II							III	IV	V	VI	
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
私たち (128)				48 (37.5)	80 (62.5)									
喜び (96)				38 (39.6)		10 (10.5)	8 (8.3)			32 (33.3)	8 (8.3)			
友千鳥 (168)				128 (76.2)	40 (23.8)									
親鳥 子鳥 (224)				120 (53.5)		56 (25.0)	32 (14.3)			12 (5.4)				4 (1.8)
ダンス オブ ピース (128)		16 (12.5)	4 (3.1)		8 (6.3)		36 (28.1)			48 (37.5)			16 (12.5)	
波上 の月 (200)			16 (8.0)	84 (42.0)		12 (6.0)	40 (20.0)			32 (16.0)			16 (8.0)	

	I		II							III	IV	V	VI	
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
合計 (944)	0	16 (1.7)	20 (2.1)	418 (44.3)	128 (13.6)	78 (8.3)	116 (12.3)	0	0	124 (13.1)	8 (0.8)	0	32 (3.4)	4 (0.4)



グラフ 1

結果と考察

「私たち」

図1～図2, 表2, 表8によればこの作品は走(ランニング)62.5%, 歩(ウォーキング)37.5%の2種類の基本運動から成り, 全体構成は前半, 走(ランニング)と歩(ウォーキング)の組み合わせによるものが16呼間行われ, 中間部の盛り上がりと思われる32呼間は走(ランニング), そして最後は歩(ウォーキング)16呼間で位置交換というABA'の形式となっている。作品の持つ感じとしては, 軽快なリズムを有する伴奏音楽同様, 明るく弾むような感じで一貫している。また, このダンスを指導するに当たり, 次のような注意事項が特記されている³⁾。

1. 此の運動は互いに終始相手に留意して相手を気持ちよく踊らせることに努力してほしいのです。

2. 三の運動の両生連手ランニングステップ回転の際は内生の軸も外生も十分に連手を伸ばして互角の力を出して引張り自然の力を利用して気持ちよく廻らせてほしいのです。

以上のことはこのダンスの表現上における重要な心得とも言うべき点を指摘していると思われる。特に1.「相手を気持ちよく踊らせることに努力してほしいのです」及び2.「自然の力を利用して気持ちよく廻らせてほしいのです」などからは, 創作者のこの作品における表現上のねらいがうかがい知れる。

「喜び」

図3～図7, 表3, 表8によればこの作品は, 歩(ウォーキング)39.6%, 跳躍(ジャンプ)10.5%, 各種ステップ8.3%, 振動(振る)33.3%, 弾性(弾む)8.3%から成り, 全体が96呼間という比較的短い呼間の中にそれぞれの運動が組み込まれ, 速さもAllegroとかなり速い中で展開している。以上を考え合わせるとこの作品には軽やかな動作と身のこなし, 身体の巧緻性が必須と思われ, またそれらは指導上の重要なポイントとも思われる。

「友千鳥」

図8～図11, 表4, 表8によれば使用されている運動要素は歩(ウォーキング)76.2%, 走(ランニング)23.8%の2種である。この作品の特徴的なことは表4からも明らかなように全体が, ABACADという典型的なロンド形式にまとめ上げられていることである。また更に, くり返されるAのフレーズの内容も8呼間ずつのロンド形式で, abab'aという組み立てになっており, 非常に徹底した形式を踏んだ構成になっていることがわかる。全体の感じとしては, 軽やかなくり返しのリズムの中で, 常に2人組で円周をまわりながら動きが進行して行く, というフォークダンス的な要素を強く感じさせる作品である。

「親鳥子鳥」

図12～図17, 表5, 表8によればこの作品は, 歩(ウォーキング)53.5%, 跳躍(ジャンプ)25.0%, 各種ステップ14.3%, 振動(振る)5.4%, 手拍子1.8%, などから成り立っており, 全体が208呼間というかなり長い呼間数を常に2人組で動くという構成になっている。この作品の注目すべきところは, まず, 最初より24呼間目から72呼間目までの動きで, 親鳥と子鳥がそれぞれのパートに別れて異なった動きを同時進行させる部分がみられるが, それぞれが親鳥らしい動き, 子鳥らしい動きを表情豊かに動くようになっている部分である。同じよう

にこの他にも、親鳥が子鳥を手招きするような動きや子鳥が親鳥を指さして跳びはねる、など常に相手と対応しながら、それぞれの役柄や気持ちになりきって、パントマイム的に動くというパートがしばしばみられる。以上のような事柄より、この作品を踊るに当たってはかなりの表現性が問われるものと思われる。しかしながら題材が具体的なイメージの持ちやすいものであるため比較的容易にその世界が創り出せるのではないかと考えられ、ゆえに小学校低学年生が対象となったのであろうと推察される。

「ダンスオブピース」

図18～図20, 表6, 表8より解緊12.5%, 重心移動3.1%, 走(ランニング)6.3%, 各種ステップ28.1%, 振動(振る)37.5%, ポーズ12.5%, という6種の運動内容から構成されていることがわかる。中でも、振動(振る), 各種ステップ, ポーズが非常に多く登場していることが目新しい。また逆にこれまで多く見られた歩(ウォーキング)が全く使用されていないのも特徴として上げられる。この作品には全6作品の中で最も多くの基本運動が使用されており, しかもダンスオブピースという抽象的な題材をポーズ(静止)で表現しなければならないこと, 各種ステップが多く行われていること, 多様な運動が盛り込まれていることなどを考え合わせると, かなり高いダンス技術と表現力が踊りこなすには要求されるものと考えられる。

「波上の月」

図21～図25, 表7, 表8によれば歩(ウォーキング)42%, 各種ステップ20%, 振動(振る)16%, 重心移動・ポーズ8%, 跳躍(ジャンプ)6%, という内容構成であることがわかる。これも先の「ダンスオブピース」同様かなり多岐にわたる種類の基本運動が使用されている。隊形も2人組から4人組となり再び2人組になるという変化を呈し, 2人が対応して動く部分も見られるなど, かなり混み入った構成になっている。その他指導者のための注意として次のような事柄が特記されている⁴⁾。

1. 運動場の都合により四列縦隊にしても差しつかえありません。
2. 臂, 體の動きを大きくして静かに行はしむる方がよいのです。

特に2の項目ではこの作品の表現上のねらいと思われる事柄が述べられていると考える。ゆったりとした波の上にゆらゆらと映る月の様子を, 静かに大きく動くことによって表出させようという創作者の意図であろう。

表9より全体傾向をみると, 今回の研究対象の6作品中「ダンスオブピース」以外は歩(ウォーキング)行進, または走(ランニング)を基調としたもので, そのうち2人組で円になって行うものが4作品と, パターンの類似するものが大半を占めていた。これは, この年の作品傾向として, 小学校低学年生向きでしかも運動会用の作品がここに集中していたためではないかと考えられる。従って, 基本運動の取り上げ方にも片よりがみられ, 緊張・蛇動・倒・平均(バランス)など高度な身体支配のテクニクを必要とする運動が見られないのも当然のことと考えられる。しかし, 振動(振る)だけは, 各種ステップ・走(ランニング)とならび, かなりの割合で使用されている。これは前回の帰国後の作品傾向の一端と思われ, 同時に緊張・ポーズ(静止)など断続する動きのリズムの基調となる運動が非常に少ないことも先の結果の作品傾向と合致するところである。今回, 非常に特殊な条件づきの作品に対象が集中したにもかかわらず, 前回同様の結果となったことは, 帰国後の作品傾向を更に確かなものへと方向づ

けたのではないかと考える。今後分析を続けることによって確かめていきたいと思う。

注

- 1) 山田敦子・田川典子「伊澤エイに関する研究(I)」東京女子体育大学紀要第16号
- 2) 田川典子・高橋繁美「図説ダンスの基本運動」昭和58年7月 新思潮社
- 3) 伊澤エイ著「学校ダンス」昭和6年1月 p.21 注意欄
- 4) 伊澤エイ著「学校ダンス」昭和6年1月 p.41 注意欄

参 考 文 献

- 伊澤エイ 「学校ダンス」 昭和6年1月 目黒書店
- 田川典子・高橋繁美 「図説ダンスの基本運動」 昭和58年7月 新思潮社
- 山田敦子・田川典子 「伊澤エイに関する研究(I)」 東京女子体育大学紀要16号
- 山田敦子・田川典子 「伊澤エイに関する研究(II)」 東京女子体育大学紀要17号

A Study of Ei Izawa (Part 4)

Chika Okuno

As a succession of the previous investigation, this study was intended to examine how the trend of Ei Izawa's works after her study abroad changed and developed by analyzing the works chronologically. Six out of thirty five works written from immediately after study abroad to January 1931 were also chosen and analyzed by the same method in the previous study. As a result, contents of fundamental movement in the works were recognized to have considerably inclined trend as these works were reflective of lower elementary school children and sports meeting. Most works were mainly about movement of walking or marching. However, swinging movement was used next to walking and running, and there was few movement fundamental for the rhythm of intermittent movement such as tension and pose. These trends correspond to the previous investigation. It can be said that the works analyzed in this study were apparently based on the trend of works after study abroad in spite of their rather peculiar nature.